

第2学年1組

保健体育科（保健分野） 指導案

日 時：令和 6年 10月 25日（月）6校時

場 所：ふれあい（2F）

対 象：第2学年3組 37名（男子19名、女子18名）

指導者：教諭 杉原 彩子

- 1 単元名 「健康な生活と疾病の予防（ウ）生活習慣病などの予防 ① がんの予防」
（がんと共に生きる、がん患者と共に生きる）

2 単元について

健康の大切さや健康に良い生活、病気の起こり方や予防等については、小学校体育科保健領域で学習し、中学1年生では健康の成り立ち、疾病の発生には主体と環境の要因が関わっていること、運動、食事、休養及び睡眠等、生活習慣が健康に深く関わっていることなどを学習してきた。それを踏まえ、2年生では、生活習慣と心身の健康の関わりや生活習慣病を予防するには適切な生活習慣を身に付けることが有効であること、健康診断やがん検診などで早期に異常を発見することが疾病の早期回復につながることを学ぶ。とりわけ、最も身近な疾病であるがんに注目し、がんについて正しく理解し、がん教育を通じて自分の人生をより良く生きる方法について考え、より良い社会環境を創り上げるための方法を見付け、共に生きる社会づくりに寄与する資質・能力の育成を目指す。

3 生徒の実態

本授業は、男子19名、女子18名、合計37名（特別支援学級に在籍する女子生徒2名を含む）のクラスで実施する。本校の2年生は、明るくて元気な生徒が多く、自分たちの意見を自由に表現できる雰囲気がある。保健体育の授業においても、苦手なことにも前向きに取り組み、仲間と協力しながら集団として高め合っていこうとする姿勢が見られる。一方で、多面的・多角的に意見を発言できることは得意としているが、他の意見を聞き、自分の考えに深く落とし込む部分には課題がある。

4 教師の指導観

生活習慣病の1つである「がん（悪性新生物）」は、近年では2人に1人が罹患する可能性があると考えられ、そのうち3人に1人が「がん」で死亡するという極めて身近な病気である。年々、死亡者数は増加しており、現象の兆しはみられない。この単元では「がん」について、基礎知識を身に付けるとともに、「がん」の予防について、グループの調べ学習等により、課題を発見し、その解決を目指した主体的・協働的な学習過程を通して、生涯を通じて健康を保持増進するための資質・能力を育成することを目指す。

また、現在及び将来の生活において「がん」に関する課題に直面した場合に、的確な思考・判断・表現等を行うことができるよう、本校で日常的に取り組んでいるコミュニケーションスキルの向上や自己理解・他者理解・望ましい人間関係づくりを目的とした「カミジャン」（構成的グループ・エンカウンター

のアドジャンを活用)を「がん教育」にも利活用し、自分の意見を筋道を立てて仲間に伝え合いながら「がん」に対する見方・考え方を働かせて、広げ深めることができるようにしたい。

更に、外部講師の話聞き、自分たちで解決できなかった問題を外部講師に質問することで、今後の個人の行動選択やそれを支える家族、社会環境づくりにとって何が大切なのかに気付くことができるような指導を目指したい。

5 単元の目標

(1) 健康な生活と疾病（がん）の予防について、理解することができるようにする。

【知識及び技能】

(2) 健康な生活と疾病（がん）の予防に関わる事象や情報から自他の課題を発見し、疾病（がん）などのリスクを軽減したり、生活の質を高めたりする視点から解決方法を考え、適切な方法を選択するとともに、それらを伝え合うことができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

(3) 健康な生活と疾病（がん）の予防について、自他の健康の保持増進や回復についての学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

6 単元の指導計画

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①生活習慣病は、日常の生活習慣が要因となって起こる疾病であり、適切な対策を講ずることにより、心臓病、脳血管疾患、歯周病などを予防できることについて理解したことや、生活習慣病を予防するには、適度な運動を定期的に行うこと、毎日の食事における量や頻度、栄養のバランスを整えること、喫煙や過度の飲酒をしないこと、口腔の衛生を保つことなどの生活習慣を身につけることが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p> <p>②がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、そ</p>	<p>①生活習慣病の予防における事柄や情報などについて、原則や概念をもとに整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見するとともに、習得した知識を活用し、生活習慣病を予防するための方法を選択している。</p> <p>②がんの予防について、疾病等にかかるリスクを軽減した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合っている。</p>	<p>①生活習慣病やがんの予防、共生について、課題解決に向けての学習に自主的に取り組もうとしている。</p>

<p>の要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p> <p>③がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p>	<p>③外部講師を活用し、がんについて、今まで習得した知識を自他の生活に適用したり、課題解決に役立てたりして、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見いだしている。</p>	
---	--	--

(2) 指導と評価の計画 (5時間計画)

単元名	健康な生活と疾病の予防②		学年	第2学年	
単元の目標	知識及び技能	健康な生活と疾病（がん）の予防について、理解することができるようにする。			
	思考力、判断力、表現力等	健康な生活と疾病（がん）の予防について、健康な生活と疾病（がん）の予防に関わる事象や情報から自他の課題を発見し、疾病（がん）などのリスクを軽減したり、生活の質を高めたりする視点から解決方法を考えたりして、適切な方法を選択するとともに、それらを伝え合うことができるようにする。			
	学びに向かう力、人間力等	健康な生活と疾病（がん）の予防について、自他の健康の保持増進や回復についての学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。			
	主な学習内容・学習活動		評価の観点		
			知識技能	思考判断表現	態度
時数	1	<p>○生活習慣病は、日常の生活習慣が要因となって起こる病気であり、適切な対策を講ずることにより予防できることについて気づく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自他の生活を振り返り、生活と健康の関係について考える。 2 生活習慣病には、具体的にどのようなものがあるか理解する。 3 1でチェックした生活習慣を続けていると、どうなるのかグループで考える。 4 続けた方がよい生活習慣と改善した方がよい生活習慣とに分け、ワークシートにまとめる。 	①	①	<p>観察</p> <p>ワークシート</p>

	2	<p>○がんになる要因には、不適切な生活習慣をはじめ、さまざまな要因があり、適切な生活習慣を身に付けたり、健康診断を受けることが有効であることについて調べ学習の中で気づく。</p> <p>1 がんについての課題に対し、グループで調べ学習やスライド作成を行う。</p> <p>【調べ学習課題】</p> <p>①がんとはどのような病気か ②我が国におけるがんの現状 ③がんの経過と様々ながんの種類 ④がんの予防 ⑤がんの早期発見とがん検診 ⑥がんの治療法</p> <p>2 完成したスライドを発表する役割分担等を決める。</p>	②		<p>観察</p> <p>スライド (ICT)</p>
	3	<p>○がんに対する基本的知識や、健康診断、がん検診などで早期に異常を発見できることや病気の回復について班で調べたことを伝えたり、各班の発表から学んだりする。</p> <p>1 自分たちが第1時で調べたことを発表し全体で共有しあう。</p> <p>2 1から生まれた疑問点を最後に共有し合い、ワークシートにまとめる。</p>	③	②	<p>観察</p> <p>ワークシート</p> <p>スライド</p>
4 本時		<p>○3時間目までに習得した知識を基に、「自分ががんになったらどうするか」という具体的な状況を設定し、ディベートを行う。このディベートを通じて「より良い生き方」について考え、さまざまな価値観に触れる機会を提供する。また、5時間目の外部講師の講話「がんと共に」につながるようにする。</p> <p>【ディベートテーマ】</p> <p>「がんになった場合、家族への相談がもたらす影響は？」</p> <p>A:サポートが得られる B:負担をかける可能性がある</p>		③	<p>観察</p> <p>ワークシート</p> <p>パドレット (ICT)</p>

	5	<p>「がんと共に」の講話</p> <p>1 外部講師である、がんケア専門の看護師から、緩和ケアのことや、がん患者への理解と共生等について話を聞き、それをもとに感じたり、考えたりする。また、ディベートで自分と意見が違う部分や納得いかなかった部分と照らし合わせ、どう判断し、行動していくのか、自分の中で答えを見付ける。</p> <p>【講話内容】</p> <p>①がんの治療における緩和ケア</p> <p>②がん患者の「生活の質」</p> <p>③がん患者への理解と共生を中心に話をしてもらう。</p> <p>2 講話を聞いて、最終的な自分の意見をワークシートやパソコンにまとめる。</p>			①	観察 ワーク シート
単元の評価規準	知識・技能	<p>①生活習慣病は、日常の生活習慣が要因となって起こる疾病であり、適切な対策を講ずることにより、心臓病、脳血管疾患、歯周病などを予防できることについて理解したことや、生活習慣病を予防するには、適度な運動を定期的に行うこと、毎日の食事における量や頻度、栄養のバランスを整えること、喫煙や過度の飲酒をしないこと、口腔の衛生を保つことなどの生活習慣を身に付けることが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p> <p>②がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p> <p>③がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。</p>				
	思考・判断・表現	<p>①生活習慣病の予防における事柄や情報などについて、原則や概念をもとに整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見するとともに、習得した知識を活用し、生活習慣病を予防するための方法を選択している。</p> <p>②がんの予防について、疾病等にかかるリスクを軽減した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合っている。</p> <p>③外部講師を活用し、がんについて、今まで習得した知識を自他の生活に適用したり、課題解決に役立てたりして、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見いだしている。</p>				
	主体的に学習に取り組む態度	<p>①生活習慣病やがんの予防、共生について、課題解決に向けての学習に自主的に取り組もうとしている。</p>				

7 本時の学習と指導（第4時指導案）

(1) 本時の目標

外部講師を活用し、がんについて、今まで習得した知識を自他の生活に適用したり、課題解決に役立てたりして、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見いだすことができるようにする。
(思考力、判断力、表現力等)

(2) 本時の評価

外部講師を活用し、がんについて、今まで習得した知識を自他の生活に適用したり、課題解決に役立てたりして、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見いだしている。
(思考・判断・表現)

(3) 本時の展開

時間	学習内容と学習活動	教師の指導・支援 (○指導 ◆評価規準)
はじめ 5分	1 前時の振り返りをする。	○スライド発表の内容をモニターに提示し、これまでの学習内容を確認する。 ○本時の学習課題や学習の内容について理解できるようにする。
	2 本時の学習課題を確認する。	
	<p>【学習課題】 「がんになった場合、家族への相談がもたらす影響は？」というテーマでディベートを行い、講師の話を聞く中で実際にがんになったときの行動選択や課題解決の方法について自己の考えを深めよう。</p>	
	3 「マクロディベート」の方法とグループの確認をし、理解する。	○事前に各自の意見をまとめ、グループを作っておく。
なか 30分	<p>【マクロディベート】</p> <p>① 4人1組×2を作る</p> <p>② テーマ「がんになった場合、家族への相談がもたらす影響は？」について 「サポートが得られる」 「負担をかける可能性がある」 でディベートを行う。</p> <p>1回目⇒前半グループがマクロディベートを行い後半グループがジャッジ(主張各1分→論争2分→後半グループジャッジ1分)</p> <p>2回目は、前半グループと後半グループが逆で行う。</p>	<p>○順番の確認を行う。</p> <p>○自分の持ち時間内に主張を行い、論争部分で、相手の意見に対して質問や意見を伝え合うよう説明する。</p> <p>○ジャッジ班は、メモなどをワークシートにし、2人で1つのジャッジをするように伝える。</p>

	<p>4 マクロディベートを行う。 意見は、ワークシートに記入し、論争部分での参考にした り、ジャッジしたりするときを使う。</p> <p>5 外部講師の嶋田さんのがん看護専門看護師としての 経験談として、どのような患者さんがいたかをテー マに基づいた視点で話をしてもらおう。(10分程度)</p> <p>6 嶋田さんの話を聞いて、考えが変わったり、深まっ たり、疑問に感じた部分を再度「主張ディベート」す る。 *4人で一斉にディベートする。 *主張ディベートなので、ジャッジは行わない。</p>	<p>○ジャッジ班は、同じ意見の2人で相談 しどちらの意見に惹かれたか判定を出 すようディベートの時間帯に支援す る。また、話を聞きながらメモを取 るよう促す。</p> <p>○患者さんががんを告知され、その後誰 かに話をしたか、がんと知った後の様 子などの視点で話を聞くよう促す。 ○必要ならメモを取るよう促す。</p> <p>○自分の心の変化や、逆に生まれた疑問 などに気付かせられるよう支援する。 ○誰の意見が正しいとかではなく、これ までの仲間の意見や講師の話を聞いて、 自分が考えたことを自由に発言す るよう促す。</p>
<p>ま と め 1 0 分</p>	<p>◆〈思・判・表③〉</p> <p>③外部講師を活用し、がんについて、今まで習得した知識を自他の生活に適用したり、 課題解決に役立てたりして、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見い だしている。</p> <p>7 最後の意見交流の内容をパドレット (ICT) に書き込 み、みんなで情報共有しあう。疑問が生まれた部分や 聞きたい部分を嶋田さんに聞く。(その答えは次回の 講演会で話をしてもらおう)</p> <p>8 情報共有した意見の中で、共感できる意見に 「いいね」ボタンを押し、嶋田さんへの質問を含めて 自分の行動選択について考えや心に残った内容など を全体で情報共有する。</p> <p>9 本時の学習のまとめと次時の授業について説明す る。</p>	<p>○各グループで出た意見をパドレット (ICT) に入力したり、仲間の意見や考 えを可視化する中で、更に質問したい ことを講師に聞くよう促す。</p> <p>○多くの意見を見たり聞き、共感できる 意見を記録する。 ○なぜその意見に共感できたか伝えるよ う促す。</p> <p>○次回の講演会に繋がるよう、教師が本 時のまとめの話と次時への学習意欲の 向上を促す。</p>

【第2、3時 生徒作成ワークシート】

5班 調べ学習

がんの早期発見とがん検診

19

がん検診

日本のがん検診の受診率は50%未満である
がん検診は各器官ごとを受けることができ、1年にどれだけ受けられるのか
何歳から受けられるのかなどが詳しく定められています。

メリット：異常なしと診断されると安心して生活出来る。

デメリット：検診が100%正確という訳ではない
検査によって体に負担がかかる可能性がある

がん検診の多くが公費による負担で行われている→自己負担が少なくなり、安価で行える。
例：胃がん検診の相場：10000円程度
甲府では1000円で行える

+厚生労働省が方針を定め推進している内容

参考：厚生労働省「がん検診」

20

がんの早期発見

がんの早期発見によって回復したり進行を食い止めた事例がある。がんを早期に発見すると治療率は、ぐんと良くなる。がん全体にでも、早期がんの段階で治療を受ければ、9割が完治すると言える。そのためがん検診の受診をし、早期発見、早期治療を受けることが大切である。

5年生存率 (%)

● 早期発見（がんがまだ小さい段階で発見している段階）
● 後期発見（がんが大きくなり転移が広がりやすい段階）

21

みんなからの質問

Q1：早期発見してもなぜ治る人が10割じゃないのか

A：がん治療が難しい理由は、がん自体が非常に複雑な疾患であるためです。がん発生に関わるタンパク質の抑制方法はまだ解明されていません。がん細胞の多様性のため、有効と思える薬剤を投与しても効く細胞と効かない細胞があります。抗がん剤治療で7~8割のがん細胞は、死滅しますが必ず生き残るがん細胞もいます。また、がんの発生場所によっても手術しにくい部位があります。

Q2：がん検診を受ける人がなぜ50%未満なのか

A：内閣府が実施しているがん対策に関する世論調査で、以下のような理由が抽出されました。「受ける時間がない」「健康状態に自信があり必要性を感じない」「心配な時は医療機関を受診できる」などの回答が多かったことから、がん検診についてその重要性や正しい知識が定着していないと考えられます。

22

6班 調べ学習

がんの治療法

がんの治療法

○主な治療法

- ①手術治療
- ②薬物療法（抗がん剤）
- ③放射線治療

●治療法は担当医と相談して選択する（家族と患者本人で選択する）

●手術治療
・手術では、がんやがんのある臓器を取り除く

●薬物療法

・がんを治したり、あるいはがんの進行を抑えたり症状をやわらげたりする

●放射線治療

・手術と同様、局所に対する治療ですが、手術のように臓器を取り除いたりすることなくがんの部分に放射線をあてる

・出典：国立がんセンター

25

みんなからの質問

Q1：それぞれの治療のリスク・正常な細胞は傷つけないのか？

A：疲労・食欲不振・下痢・口腔内炎症・便秘・高血圧・吐き気・嘔吐・皮膚障害・脱毛・骨髄抑制・むくみなどがあります。中でも脱毛だけは対処する方法が未だ見つからない。その他は、薬等で緩和したりすることができる。

骨髄抑制とは⇒骨髄は骨の中にある組織で、白血球・赤血球・血小板などの血液成分をつくっています。骨髄にある細胞が、がん治療でダメージを受けると、これらの血液成分をつくる機能が正常に働かなくなります。この副作用のことを「骨髄抑制」と呼びます。

26

がんについての「マクロディベート・主張ディベート」意見記入用紙

テーマ
『がんになった場合、家族への相談がもたらす影響は？』

意見 A(サポートが得られる)	意見 B「負担をかける可能性がある」
自分の意見	自分の意見

○講師の先生や友達の見聞を聞いての感想・判定

メモ	判定
----	----

○「主張ディベート」共感した意見

【マクロディベート・主張ディベート】

第1グループ

A	B
A	B

A	B
A	B

第2グループ

A	B
A	B

A	B
A	B

第3グループ

A	B
A	B

A	B
A	B

第4グループ

A	B
A	B

A	B
A	B

マクロディベート

主張ディベート

【ディベートを取り入れた理由】
ディベートは「アクティブ・ラーニング（能動的学習）」の形態の1つ。誰かと一緒に調べたり議論をしたりしながら学ぶほうが、知識の定着率が高くなる傾向がある。自ら議論を立てたり、相手の発言の論理を追ったりすることで、論理的な思考力も伸ばすことができる。また、限られた時間の中で素早く考え、発言する力も身につく。さらに、肯定・否定両方の立場から一つの論題について検討することで、一方の考え方を鵜呑みにしない批判的思考力（クリティカル・シンキング）がつく。

【マクロディベート】
2対2（少人数）でディベートを行い、ジャッジチームは主張内容が説得力のあった方に「A」「B」の札を上げ、その理由を答える。

【主張ディベート】
いろいろな情報を聞いた中で、議論は交わすがジャッジは行わない。賛成・反対にこだわらず、自由に発言したり、質問をしたりする中で議論を交わす。

【生徒に対する事前・事後アンケート結果について】

質問 1 がんの学習の重要性について	実施前	実施後	増減
がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ（そう思う）	70.8%	83.3%	+12.5
がんの学習は、健康な生活を送るために役に立つ（そう思う）	66.7%	83.3%	+16.6
質問 2 がんという病気について	実施前	実施後	増減
がんは誰もがかかる可能性のある病気である（正しい）	95.8%	96.7%	+0.9
がんは進行すると、今まで通りの生活ができなくなったり命を失ったりすることがある（正しい）	100%	100%	±0.0
がんは日本人の死因の第2位である（誤り）	54.2%	53.3%	-0.9
たばこを吸わないこと、バランスよく食事をすること、適度な運動をすることなどによって、予防できるがんもある（正しい）	95.8%	93.3%	-2.5
早期発見すれば、がんは治りやすい（正しい）	91.7%	100%	+8.3
体の調子がいい場合は、定期的に検診を受けなくてもよい（誤り）	79.2%	100%	+20.8
がんの治療法には手術治療しかない（誤り）	66.7%	96.7%	+30
がんの痛みは我慢するしかない（誤り）	62.5%	96.7%	+34.2
質問 3 がんへの考えと共生社会について	実施前	実施後	増減
自分のがんにならないと思う（どちらかというそう思わない・そう思わない）	50%	70%	+20
将来、たばこは吸わないでいようと思う（そう思う）	87.5%	80%	-7.5
日頃から、バランスのよい食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う（そう思う）	66.7%	73.3%	+6.6
がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う（そう思う）	50%	73.3%	+23.3
がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである（そう思わない）	16.7%	33.3%	+16.6
がんになっても生活の質を高めることができる（そう思う）	41.7%	56.7%	+15
がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい（そう思う）	66.7%	73.3%	+6.6
がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う（そう思う）	50%	70%	+20
家族や身近な人が健康であって欲しいと思う（そう思う）	91.7%	100%	+8.3
長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う（そう思う・どちらかというそう思う）	95.8%	96.7%	+0.9

○アンケート結果の考察

事前アンケートを行った時点で、質問1の「学習の重要性」について、70%以下にとどまっていたが、授業後のアンケートでは、80%以上に増加した。これにより「がんの学習」の意義について8割以上の生徒は有効であると、考えが変わったことが見受けられた。また、質問2の「がんという病気について」の項目では、定期検診や治療法、痛み等に関する正答率が事前アンケートよりも事後アンケートの方が20%から30%上昇した。これは、自分たちで調べ学習を行い、主体的な学びにより学習が深まった結果といえる。

質問3の「がんへの考えと共生社会について」の項目においても、「自分もがんになる可能性がある」「検診を受けようと思う」「治療法は医師だけが決めるものではない」「がんになっても生活の質を高めることが

できる」「がんについて身近な家族から話ろうと思う」と多くの項目で15%~20%以上、回答率が上がった。

今回の公開授業では、「外部講師を活用し、がん患者との共生する方法やがんを予防する方法を見いだす」ことをテーマに取り組んだので、質問3の項目における回答率が多く上がったことに関しては、外部講師の方が話をしてくれた患者の実情や、仲間とのディベートにより、多くの価値観に触れ、より深く自分のことや家族のことを考え、自己の考えを深めた結果だと評価したい。このことより、外部講師を活用したがん教育により、通常の授業では考えが及ばないところまで思いを巡らせることができ、自己と向き合う時間を作ることができたという意味で、一定の教育効果があったと考えられる。

【「がん教育推進校授業公開」アンケート結果（上条中学校）】

対象者 がん教育総合支援事業連絡会委員1名、一般参加者8名

	達成できた←			→達成できなかった	
	5	4	3	2	1
本時の目標は達成できたか	3	4	2	0	0
外部講師の活用は効果的だったか	7	1	1	0	0
学校におけるがん教育を進めるうえで、本日の授業はどうだったか	5	3	1	0	0

○本時の目標は達成できたか（理由）

- ・生徒が自分なりにがんと向き合い、家族のことも考えながら、自分の意見を導き出していた。外部講師の話にも真剣に聞く中で、がんの怖さだけでなく、どうすれば精神的にも身体的にも克服することにつながるか真剣に考えていた。
- ・がんを罹患してしまった場合の影響についてディベートと外部講師から話を聞いての感想から、本授業までの知識を活かしながら、行動選択や課題解決方法を考えられていた。
- ・生徒がディベートに積極的に真剣に取り組んでいる様子が見られた。
- ・自分たちで調べた知識と講師から実際の事例を照らし合わせることで、自分たちの生活に置き換えて考えることができていた。
- ・ディベートの場面では、がんになった場合を考えると、生徒がどの立場から考えるかが大事になってくる。その部分が明確でなかったために、論点がぼやけてしまった印象を持った。講師が事例提供をしてくれたことをきっかけに、考えを深めることができた。
- ・事前に学習した知識をもとに、生徒たちが自らの意見をまとめて話し合い、本時の目標について考えることができた。
- ・がんという言葉が珍しく感じる集団で、今まで勉強したことを活かしながら、がんになった場合家族に相談することで予測される影響について身近な例から考えることができていた。また、身近な存在から幅を広げ、がんを患う人へ自分に何ができるかという考えに繋がった。

- ・今まで学習してきた内容をふりかえりながら、がんになった場合のことを多面的に想像し、自分の考えをディベート等で伝えることができていた。
- ・ディベートの中で、生徒たちが一生懸命がんについて考えたことは達成できた。一方で、前授業で学んだ知識からだけでは、患者の心を考えた相談がもたらす影響は難しかったのではないかと。先に外部講師の事例による患者の心理の話聞いてからでもよかったと思う。「がんになったのは生活習慣が悪かったから。」
「がん患者がかわいそうだからサポートする。」ということではなく、正しく理解していければと思う。ステップアップの次の授業で、がん告知からのサポートや支えがなぜ必要なのかを考えることで、がんとの共生、がん患者への理解につながる効果を期待したい。

○外部講師の活用は効果的だったか（理由）

- ・本時の流れに沿った事例を説明していただき、事前の打ち合わせがしっかりしていたことが伺えた。ただ、感情論だけでなく、客観的ではあるが、患者の気持ちにも寄り添ったがん治療の例を紹介してくれたのが良かった。
- ・特に本学級は、周りにがん患者がいたことがない生徒が多かったため、事例を聞いたのは大変良い経験だったと思う。
- ・がん患者さんと直接接している方の体験に触れることは効果的だと思う。
- ・親世代であり、子どもが自分たちと同じ年代である人の事例を聞くことで、がんをより身近なものとして捉えることができていた。
- ・実際に病院で告知の場に立ち会う方が、事例をお話してくださることで、より具体的に、身近に、がんによって起こる体の変化や、心の動きを知ったり感じたりすることができた。
- ・学んだ知識と仲間との話し合いだけでなく、外部講師の経験談を聞くことでがんという病気をリアルに感じている姿が見られ、学習が深まっていた。
- ・実際の事例を元に、がんという病気は身近に存在していることや、大切なことはがんを早期発見すること、そのために自分は何を伝えていくかなどが、考えられていた。そこには外部講師の力が非常に大きかったと思った。
- ・がん患者さんの支援をされている看護師の講師のお話は、現実をリアルに感じ取ることができました。また、がん患者さんご本人、そしてご家族のお気持ちもお話いただき、両者の気持ちや背景を知る貴重な時間になった。
- ・外部講師のお話が分かりやすかった。一方で、患者の事例では、患者家族の立場で考える、周囲の人の立場で考えることはできたが、患者本人の立場で考えることはがん患者の気持ちの部分での思いが難しかったのではないかと。また検討会でも話が出たが、今回は、がんを克服した前向きに生きている人の話をしただけであればと思う。

○学校におけるがん教育をすすめるうえで、本日の授業はどうだったか(理由)

- ・小学校でも活かすことができる内容が多々あった。
- ・外部講師の活用方法や、中学生がどれほどがんの知識があるのかの参考になった。
- ・外部講師の先生が授業に参加するにあたり、準備をしてくださり、成果のある内容だと思った。
- ・がんに対する関心が強まり、早期発見・早期治療することの重要性を学ぶことができたと思う。
- ・ディベートのテーマや生徒の立ち位置が客観的だったことで、過度に深刻にならずにすんだ面と、ディベートで深まりを得にくかった面があると思った。
- ・外部講師の活用を含めた単元の指導計画がしっかりと構成され、がん教育を進めるモデル授業となっていた。
- ・自分の考えを述べる機会や、他者の考えを聞き合い意見を深める取組が素敵だと思った。外部講師の活躍もとても効果的だった。
- ・本校でもがん教育を行っているが、限られた時間の中で行うため、知識習得がメインとなり、一方的な授業になりがち。しかし、今回の授業のように、ディベート形式を取りながら、生徒がいろんな意見を出し合い意見をぶつかり合わせる点も学習となり、ジャッジ判定をする生徒についても、自分の考えを深める手法だと感じた。
- ・生徒たちが自ら考え、意見を言い合いながら学びを深めていくことはよかった。ただ、調べ学習とつなげる内容にするならば、ディベートのテーマをもう少し生徒が自分事として考えられる内容にしても良かったのではと感じた。

○学校におけるがん教育をすすめるうえでの課題について

- ・外部講師の選定と事前の打ち合わせ、児童生徒へのがんの意識の持たせ方とあまり深刻になりすぎないこと。
- ・体育科との連携、時間の確保。
- ・教職員の意識が同じ方向に向かないこと。
- ・児童生徒のおかれている状況をよく知っておく必要があること。
- ・がんはステージによっては命に直接関わる病気であり、生徒が身近な人をがんで亡くしていたり闘病している人がいたりする場合がある。がん教育をするうえで、生徒の気持ちに配慮することは必須であり、誤った解釈をしないように学習を進める必要がある。
- ・小学生へのがん教育の方法についても実態等に応じた方法を勉強していきたい。
- ・単発的ながん教育にするのではなく、中学校3年間を見通しながら、継続的に学びを続けるにはどのようにしたらよいか。他教科や他行事との連携等も大切にしていきたいが、難しさを感じている。
- ・医療者の多くの方が患者の事例をもとに話すケースが多いが、がん患者への理解については体験者の声をぜひ検討してほしい。がん患者の本心は？という点では、やはり体験した人にしかわからない気持ちがあると思う。がんの正しい知識は医療者から、がん患者への理解は体験者から、そして生徒をよく知る教職者の方々との連携がより深いがん教育につながると思う。

○その他（気づいたこと・感想）

- ・生徒が暗くなりすぎず、しかし、茶化しているような感じもなく、メリハリの効いた授業態度に大変好感を持てた。
- ・和やかな雰囲気の中でも、生徒たちが真剣に取り組んでいる姿に感動した。
- ・2つのディベート方法を取り入れることで、お互いの意見を肯定的に捉えながら考えを深めることができ、講師による事例を聞くことで身近な生活に置き換えて考えることができていたので、とても参考になった。
- ・生活習慣病が生活習慣のみによって罹患するとも言いきれないところが、難しいと改めて感じた。外部講師の方も学校の力になって下さるので、教職員の学びを手始めに、一歩ずつ進んでいこうと思った。
- ・生徒たちがディベートで意見をしっかりと発表したり、落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組む姿から、上条中の先生方の丁寧な指導が生徒たちに行き渡っていると感じた。
- ・中学生の授業を見ることは初めてで、とても勉強になった。自主的に発言する子たちが多くて、日頃からの先生方の授業づくり・クラスづくりが素敵だと感じた。
- ・生徒が自分自身そして家族の健康を考え、よりよい状況や環境を考えている姿勢に驚かされた。ICTの活用もとても効果的で参考になった。
- ・今回の授業では、がんの方が身近にいないとのことだったが、知られたくない、家族から誰にも言わないようにと言われているケースもあるのでがん患者が身近にいることを前提に、配慮事項は考えておいた方がいい。今回、私自身は生徒の本音から、一般のがんを知らない人たちの気持ちを知る機会になった。しかし、体験者として生徒たちの悪気のない言葉は、非常にづらい気持ちにもなった。がんになりたくてなったのではない。要因の分からない生活習慣に関わらないがんも半分以上ある。そして、ステージがどうであろうと、がん治療は風邪などの病気治療とは異なり、本当にきつく、長期にわたることが多いため大変である。そのことは理解して欲しいと感じた。調べ学習のスライドの確認。出典の記載がないところも見受けられたが、生徒が調べた内容の確認のためにも記載は各スライドでしたほうが良いと思う。今回のディベートから考えた提案。ディベートのテーマ：子ども達に話す？話さない？実際のがんと告知された後、さまざまな選択しなければならないことからがんを考えていく内容。【仮定：40代パート乳がん罹患、子ども2人（中2、小6）4人家族。／事前学習として がんの発生、治療の種類・選択、病院選び方、生活の変化など】体験者にはその時々困ったこと、悩んだことの体験談を聞き、医療者には、さまざまな選択をしていく上での注意点などを聞くことで、本当の意味でのがんに対する理解につながっていくのではないかと思った。仮定は、話をしてくれるがん体験者の体験に合わせた内容にすることで、さまざまな体験者の話が聞ける。また子ども達に話すか話さないかのディベートのため、配慮リスクも少ないと思われる。がん教育のやまなしモデルにできるのではないか。

【甲府市立上条中学校におけるがん教育について】

○目標

- ・健康について正しい知識の習得を基に、健康の維持・増進に向けて試行し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- ・社会に出た際に、家族や地域の健康課題について主体的に考え、行動することができる力の基礎を養う。

○保健分野の充実

- ・多くの情報の中から知識を正確に伝え、理解することができるようにするための授業方法や教材の工夫を探究していく必要がある。
- ・時代に沿った情報や、正しい知識を伝える教師の力量を高めていく姿勢と研究、実践が大切である。
- ・保健体育科の教師間で情報共有を密に行い、クラスによって偏りのない授業展開ができるようにする。
- ・生徒たちの深い学びを促すための日々の授業改善と他教科との連携を図っていく。

○学校教育活動の関連付け

- ・教師（保健体育科内、養護教諭）や教科（総合的な学習の時間、道徳、特別活動）、との連携・協力を推進する。教科等を横断したカリキュラム・マネジメントの視点で、生徒たちに多様な関わりや指導をし、物事を多面的・多角的に学べるよう教員同士の指導方法や連携方法の改善、工夫を行っていく。
- ・外部講師との連携については、地域社会の現状や取組等も理解し、協力を得る中で、継続的に外部講師の活用と連携を図りながら継続的に取り組むことが大切である。
- ・医学の進歩や時代の変化に沿って、教師自身も学び続け、それを生徒に還元していく姿勢が大切である。